

釣れ釣れなるままに

2012年思い出の釣行記 PART. 5

意義のある1

鹿島釣狂

意義のある1枚

7月28日、とんとん会の大会に参加させていただいた。他会の大会なのでタカノハ狙いでのおんびりと竿を振るのもいいだろう。大会範囲は様似港～襟裳港で、先日の7月1日の釣遊会第4回大会で島氏が53cmのものにしたのは様似港だった。そこは私も昨年10月大会で実績のあるところだ。下近浦でもこの時期にタカノハを釣ったことがある。バスの中で菅原氏が、ニカンベツ川河口で66cm上のタカノハが上がったという情報をくれた。タカノハは今年絶好調のようである。2年前、タカノハの情報を聞きつけて白里谷に入ったが放流サイズのタカノハばかりで涙をのんだ。しかし、小物であってもあれだけの数が釣れたのだから、2年後の今は35cm以上には成長しているだろう。タカノハは成長が速いと聞いている。入釣場所は白里谷に決まった。

漁師が掛けた梯子を下りたそのまん前の砂浜が釣り場だ。2年前は小川の左で竿を出したが、右も実績があると聞いていたので、沖に根があると思われる小砂利が打ちあがっているところで竿を設置した。一応大会なのでまずは嫁さんの確保をとアカハラ仕掛けを近投する。すぐに35cm程のアカハラがあがった。遠投はタカノハ仕掛けだがピクリともしない。前回はリリースサイズのタカノハが次から次へとかかったので期待が持てたのだが、全くピクリともしない。

3時、干潮時間帯になったので昆布原の濃い根のほうに移動した。そして、防潮堤まで打ち付けていた波も収まっていたので、その前に広がった石原で竿を設置した。アカハラも4本確保しているので、あとはタカノハだけだ。そこで、30cm程のハゴトコがきたので、何とか2魚種5匹はそろった。しかし狙いとしているタカノハはまだ来ない。5時、

その場所に昆布取りの舟が集結してきたので、邪魔になってはいけないと舟の来ない根境へと移動した。ここでもハゴトコばかりである。そして今度は、釣り場とした防潮堤の上に昆布巻き上げ機を積んだ軽トラがやってきた。まもなく、昆布で満載になった磯舟が、その昆布を陸揚げするために、釣り場に近付いてきてしまった。作業の邪魔になるのではないかと尋ねてみたが大丈夫だという。昆布を空にした舟が磯を離れやすいようにと後押ししたりして、手伝いの真似事をしながらしばらくやっていたが、やはりあずましくない。この根境ではアブラコもカジカも狙えるシタカノハだっと思うが更に移動することにした。

今度は沖に大きな岩が見える砂原で竿を出した。私が投げている距離と同じ所で漁師が胸まで浸かって昆布取りをしていたところだ。ここが本命場所といわれているが果たしてどうなのだろうか。全くアタリは出ない。ずいぶんと浅いのだ。しかし、昆布取りをしていたということは根があるということなのだろう。根を探りながら仕掛けをサビくが、魚からの反応は全くなく、エサもつけたままの形で戻ってくる。

少しでも遠くへと1本バリをフルスイングしている最中、ガタガタと音がして三脚に立て掛けてあった竿が飛んでいった。カモメだろうか、磯舟だろうか。しかし、その気配はない。大慌てで、波打ち際にまで引きずられた竿に跳びついた。ふけた道糸を張ると魚が確かにいる。大きく合わせを入れてからリールを巻くが竿をあれだけ飛ばした獲物にしては簡単に寄ってくる。ガッカリしながら半分ほど巻いたところで急に大きく刺さりこんだ。大物が反転して沖に向かったのだ。今度は慎重にやり取りをしながら波打ち際まで引き寄せた。奴は波打ち際でもひと暴れしたが寄せ波に乗せてやっとのことでずり上げた。菱形の黒い塊が砂浜に横たわった。タカノハだ。奴はこの日のために作ったタカノハ仕掛けにかぶりついていた。タカノハをバツカンに収めてから、竿を三脚に立て掛けようとする、タカノハに竿を引きずられた跡がくっきりと砂浜に残っていた。

朝方から昆布漁のことなどをとり止めも無く話していた老婦人が近づいてきて「大きいねえ。良かったねえ」と祝福の声を掛けてくれた。そして、「以前はタカノハが網にもよくかかったが今年は全く駄目だ。ここら辺も昆布がよく生えていたが、その根が埋まってしまって最近では釣り上げた人は見たことがねえ。先日、東平宇でタカノハが上がったと聞いたが……。都会に出ている息子が帰ってきた時には、前浜でタカノハをよく釣ってくる。息子は名人だからねえ。ほらあそこに見える茶色の屋根をした家のまん前の砂浜だ」と指を指して教えてくれた。この次に来た時には、その老婦人の家の前で挑戦することにして竿を畳んだ。

審査の結果、優勝は山中で竿を出して大カジカと大アブラコを揃えてきた山田努氏だった。私はといえばアカハラ4とタカノハ1で4位だった。成績の方はともかくタカノハを狙って釣りあげたことに意義を感じながら、その価値ある勲章を荻野会長から頂いた。



移動して竿を出した昆布根原



私が投げている距離で昆布取りをしていた漁師（岩の右に見える）。正面の路頭岩に向かって遠投をかけた



オリジナル仕掛に食いついたタカノハ



タカノハに引きずられた竿とリールの跡



意義のある1枚

意義のある1本

8月25日、26日、27日と連休が続くので夏の風物詩でもあるアナゴ釣りにでも出掛けようかと思うが、今年のアナゴ釣りは絶不調だ。1 昨年のアナゴフィーバーが忘れられず、時期的にももうそろそろかなと釣り新聞をのぞいても情報が全く出てこない。苫小牧港でもたまに★マークが1つ出たり消えたりしている。24日、1本でも釣れば御の字かと、勤務が終わった午後4時、すでに用意してあった荷物を積み込んで苫小牧港に向けて出発した。

南埠頭では大型船が入港していて狙いの場所は塞がっていたが、他は釣り人も疎らで私

と同じように「もうそろそろかと来てみた」という人がほとんどだった。右角で投げサビキをしていた釣り人が帰り支度をし始めたので、そこに入れさせてもらった。薄暗くなりかけていたので車のライトを点けて準備した。

ヒトデを相手にしながらも竿先を見つめているとそれらしいアタリが出て、フワフワ、フワフワ、フワフワするがくい込まない。竿を手にとって次のフワで合わせてみたがスカ。あわててもう一度同じ所に振り込むと同じようなアタリで今度は乗った。40cmほどの小アナゴだったが1年ぶりに味わう手ごたえである。

アタリが続かないので周囲の状況はどうだろうと偵察がてらぶらぶらするとこれも40cm程のアナゴ1本を釣り上げた釣り人がいた。その釣り人は4日前に私が竿を出しているところで60cmのアナゴを釣ったらしい。

午後10時、「釣れないので帰る」と女房にメールした後片付け始めると、フワフワ、フワフワ、ククン、ククククッとアタリがありそいつが見事に乗った。しかし手ごたえはあのアナゴ特有のものではなく30cm程のソイだった。ガクッとくる。そして、その隣の竿にもフワフワ、フワフワ、フワン、フワン、フワーンと竿先が入る。グッと重量感のある魚が乗った。重みに負けないようにそして道糸が切れないようにとゆっくりと巻く。時折グググッと大きく刺さり込む。そして更にグリーンと重くなった。負けまいと少し力を入れて引くとフッと軽くなった。取り逃がしてしまった。PE0.8号のテーパーラインの結び目から切れていた。何だったのだろうか。大アブラコだろうか。それとも大クロガシラだったのだろうか。大ゾイだったかもしれないぞ。大アナゴだとしたら泥の中にでも潜り込んだのだろうか。それにしても重たかった。残念ながら、タカノハに続いて意義のあるものになるはずだった1本は取れなかった。

その後少し粘ってみたが35cm程のエンピツアナゴがアタリもなくグルグル巻きになって掛かってきたのみだった。帰り際に地元の人に挨拶をする。すると「大アナゴは、そのような引きで1mを超えるものもいる。最近海底に泥が溜まっているので、天秤仕掛けだとハリが泥の中に埋まってしまう。2本針胴付き仕掛けで下バリからオモリまでの距離を長くしたものが有効だ。菱中造船所前はひどい混み様で地元の人間でさえなかなか入れない。アナゴやクロガシラは中央南埠頭が名を轟かせていたが、3年前に終わってしまった。去年の地震後はこちら側の岸壁で釣れるようになった。中央北埠頭、晴海埠頭、木材埠頭辺りが有望だ。クロガシラは3月中旬から釣れ出し4月中旬が一番よく、5月は小型が多くなって遅いぐらいだ。」と耳寄りな情報を教えてくれた。さてさてこの後はどうしようか。アナゴ釣りは来年になってしまうのだろうか。



意義の感じられないアナゴとソイ